
続とらドラ！

不幸男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続どうじだつ！

【Zコード】

Z6350X

【作者名】

不幸男

【あらすじ】

え～これ俺がやんの～？めんどくさいなーもー、つて、わかった、わかつたって！！頼むからその木刀しまつくれよ、タイガー。えーと、あ、俺、春田で～す。えーこの作品は？アニメのラストから5年後の話です。アニメの話をベースとして作っているのでアニメの方を見てたがいいかもでーす。まあ内容知つてれば見てなくても大丈夫だよ。ほーらこれでいいんだろ？やればできるじゃん俺！つて痛つたあーなんで殴んのさあ、ちゃんとやつ…痛たたたすいませんでした。もうなんかわかんないけどすいませんでした！！！許し

てぐだるーいーーーー

第1話「虎と竜、再びーー」その壱（前書き）

ども、不幸男です。

初投稿です。文法ミス、誤字脱字、キャラ崩壊は大目に見てもらえるとありがたいです！

ただの妄想ストーリーですが楽しんでいただけたら嬉しいですーー！

第1話「虎と竜、再び！－」その壱

俺たちの卒業から5年。

未だに俺たちが打ち立てた2-C完全優勝の記録は破られていらないらしい。

俺、高須竜児は現在、俺、大河、泰子の3人家族。

そして今月末には4人家族になる予定である。

こういう話をするとのろけ話だと思われてしまつが今はとても幸せだ。

俺は大学で栄養学を専攻し、卒業後は在学中にアルバイトで貯めたお金で（とは言つても、大河と仲直りした逢坂父からのお金が8割を超えていたが）念願だったこの【ドラゴン食堂】を立てることが出来た。

ちなみに食堂の奥が家となつている。

しかも一階建てだ！

大河は店員として（とはいっても、あんまり働かねーし、たまに働くかと思えば、料理を落とすしこぼすし……という有様だが。）、俺は「ツクとして働いている。

まあついでだが大学卒業後、行く当たがなかつた春田を拾つて働かせてやつていることも紹介しておこう。

本当についでだけど。

そして今日、その春田はとこうど、書きたいことがあると言つて休みである。

春田は文化祭で書いたプロレスショーのシナリオが大ウケしたこと味をしめ、それから小説を書くことが趣味になつたようだつた。

たびたび小説を書いてはクラスメイトに見せて感想を求めている姿は今でも覚えている。

正直、内容はそこまで面白くない。

しかし嬉々として小説を見せてくれるのに面と向かって面白くないと言えないものである。

それがよくなかつたらしく、今では、よく作家を気取つて勝手に3田へらい休んだりする。

そのたびに店員の人数が足りなくなつたりするので店としてはかなり迷惑な奴だ。

まあ春田の迷惑伝説を挙げるときりがないのでこのあたりにしておひつ……。

とりあえずみんなは幸せに……

「りゅーじーー！りゅーじーー！オーダーはいつたよー！」

俺がいる厨房に向かつて、かなり大きな声で叫ぶ大河。

つたく人が折角思い出に浸つているのに邪魔しやがつて。

大河は今珍しく注文をとりにいっている。

しかし大河のお腹は結構大きく膨らんでおり、もう働くには相当きつい体であることは明白だった。

「馬鹿野郎！お前はでなくていいっていつただろうが！妊婦はおとなしく寝てろよ！」

こちらもタラコスパゲッティー を仕上げながら大きな声で言い返す。

「この駄犬！今日は春田が休みなんだから人数たりないでしょっ！しかも日曜日のお昼よ！お・ひ・る！あいつがいてもたりないわよ！」

大河がドカドカと機嫌が悪そうに……訂正、機嫌悪く、厨房の方に入ってきた。

「昼からは櫛枝が手伝いに来てもらえることになつてんだよ。あいつのバイトテクは半端ないからな。何とか乗り切れるだろ？」

櫛枝に絶対的な信頼をおく高須竜児であつた。

なんて思いつつタラコスパゲッティー を作り上げる。

あいつの食器洗いの技術はかなりのものだ。

その上、人一倍働くから本当に助かる。

本格的に雇うことを考えようか……？

ちなみに櫛枝は今、幼稚園の先生をしている。

「ならいいけど……」

俺の気遣いが少し照れくさかったのか、俯きながら大河は答えた。

ゆつぐりとした足取りで店の奥に歩いていく。

「腹だして寝るなよ~」

こつちも若干、恥ずかしくなったので少しだけ意地悪をした。

「バカ！」

思いつきドアをしめる大河。

俺の見間違いかもしれないが顔の色が明太子のように赤くなっていたのが見えた。

タラコスパゲッティーの作りすぎだな。うん。

「あ、そういうえば竜児」

大河はひょいとドアから顔を出した
まだ居たのかよ。

「今日のこの回窓会、またウチでやるんでしょへやんと準備
しどきなさこよ。じゃあ私、寝るから……」

。

やべー。

本氣で忘れてた。

現在、午後8時。

元2-C同窓会開始。

もちろん元失恋大明神こと、北村の仕切りでこの回窓会は始まる。

「えー今回、『多忙の中お集まりくださりありがとうございます』
今日は雲一つない青空の中……」

空はお世辞にも晴れとは言えない曇り空だった。

もううん夜の8時に青空が見えるわけもなかつた。

そしてなぜここには体育祭の開会式で行われる『校長先生のあいさ
つ』みたいなしゃべり方をするのだろうか。

激しく長くなつてだつた。

「そんなん！」話はこゝからで、始めよつぜー

ナイス能登ー

高校時代からメガネ以外変わっていない事で有名な能登がビールの入ったグラスを高らかに上げ訴えた。

ちなみに眼鏡の変化も色が赤に変わっただけだ。

そんなんだから地味キャラって呼ばれるんだよ……。

「つむ、そうだな。こんないい日に長々と話すのも無粋だな。よしじでは省略して…… わあ、今日につ日本を盛大に楽しもうではないか！乾杯！」

「乾杯ー！」

北村の号令とともに馬鹿騒ぎが始まった。

どんなに時がたっても、いつやつて集まれば馬鹿騒ぎができるのは2つのいいところかもしれない。

いや悪ことこのどなのが？

「料理はあるけどあるからな。じゃんじゃん食えよ」

もうひん誰も聞いていない。

まあそれ程、重要なことでもないのでもそのままでつもの席に座った。

チビチビビールを飲みながら会話に耳を傾ける。

「わよつとわやわぞ撮影全部キャンセルして来たのに私が一番早く
つべつてじりこり」と?」

今や一大女優となつた川嶋がジョッキ片手に怪訝そつた顔で訴える。
それはお前が一番樂しみにしていたからだろつ……? とは口が裂けて
も言えない。

「ハハハー! あーみんらしげねつ!」

さわやかに、そして朗らかに、昔と変わらぬ顔で笑う櫛枝。

「なんだこの脳細胞筋肉バカ!」

売れつ子女優がこんな口をきいていいのか。

……まあだめだろつ。

こんなやつて喧嘩してるヤツ、ここにいらす回も遊びにこつてる
から仲はいいんだよな。

罵声といつもサイルを櫛枝に撃ち続ける川嶋。

ていうか「イツ飲みすぎだろ。

何杯目だよ……。

「せりほり畠美ちゃんおたえて、おたえて」

未だにギャルを卒業できていない木原が止めに入った。

「もちろんこじんなことで川嶋のミサイルが止まるはずがなく、

「あ～あ。 麻耶ちゃんはいいよねー。 彼氏がいて」

とあえて大きな声で木原に言つた。

同時に木原の肩がびくっとはねる。

「な、なんでそんなところに話が飛ぶの！」

木原は手をバタバタと振り川嶋の言葉を止めようとするが、川嶋は
そんなことお構いなしにミサイルを撃ち続ける。

「今日も能登くんと、お・て・て、繋いで来たもんねー。 あ～羨ま
しいわあ～」

「え……？」

凍りつく2 C一同。

3秒の沈黙を置いて叫び声があがる。

「え～あの麻耶ちゃんが……？」

「嘘でしょ？ねえ嘘つて言つてー。」

「クソッ。俺、木原の事好きだったのにーー。」

「おーおー幸せ振りまいてんじやねーよーーー。」

「リア充爆死しろ」

「ブッ殺ス……能登」

「ちゅうひとタウンページ殺し屋の電話番号調べてへいの

ちゅうと待て。

最後の方、発想危なすぎだら。

あと一応断つておーがタウンページに殺し屋のつてないから。

「あああ畠美ちゃんー? まさか見てたの?」

能登が尋常じゃないほどの汗をかきながら川嶋を見る。

しかし川嶋は

「うー。本物だったの」

と、匕首を刺した。

もひ॥サイルじゃねえ。

ナパーーム弾だろ。

「畠美ちゃんーもつこれ以上なにもいわないでー。」

木原が半泣きになつたところで川嶋のミサイルもとい、ナパーム攻撃は終了した。

しかし酒がはいつた川嶋は誰にも止められない。

これ以上、撃墜者を増やすなよ……。

「それに祐作、あんた何、会長と2人も子供を抱えちゃつてるのよ。しかも双子。」

こちらはみんなすでに知つてゐる事実である。

北村はアメリカまで会長を追いかけ、見事会長のハートを射止めたのであつた。

今は会長と2人でスーパーかのつ屋を営んでゐる。

もちろん俺はお得意さんだ。

しかし顔なじみだからといって代金をまけてくれたりしないところが会長らしい。

「ハツハツハツハ！ちなみに10人まで作る予定だぞ。」

10人つて……やりすぎだろ。（別にいやらしい意味ではない。）

そのまま川嶋は小さい頃の北村の恥ずかしいエピソードを語り始める。

ミサイル艦は次なる標的として北村を選んだよつだ。

普通の人ならば恥ずかしすぎて次の日寝込むほどレベルの話を北村は笑つて済ませる。

北村の器のでかさを思い知った瞬間だった。

ただ恥ずかしいという感情がないだけかもしれないが……。

ていうか、北村……お前……そんなことをしたのかよ。

「子供と言えば、たかっちゃん。今月末には産まれるって本当?」

ここに来て春田が俺に話を振ってきた。

お前はここに働きに来てんだから知ってるだろ。

完全に酔ってるな、コイツ。

てこりかかコイツ今日、休んだこと謝る気ゼロだわ。

「あ、おう。女の子だ。」

「そつかそつか。良かつたねえへたかっちゃん!」

だからお前は知つてんだろうが。

つたく、アホみたいな声だしやがつて・・・あ、アホか。

「名前は決まってるの？」

ダメージを全く受けない北村に飽きたのか川嶋が会話に参加してきた。

「ああ。明暗の『明』につるぎの『兎』で明兎みんとで名前だ。玉兎つて漢文では『月』つて意味で月のように暗い場所でも明るく輝ける子になりますように・・・と思つて」

「.....高須くんにしては、いい名前、つけたじゃない。」

川嶋がミサイル攻撃中からは想像できないよつな優しげな眼差しを俺に向けた。

「たしかに考えたのは俺だけど、『月』つていう発想はお前から取つたんだぞ。昔、俺の事、月だつて言つてたろ。だからお前も名付け親みたいなもんだな」

「は、はあ？ そんなん名付け親とかいわねーし。畠美ちゃんにそんな役、押しつけんなっての」

目線を右に流す川嶋。

毒づいているが、照れているらしい。

「大きくなつたらウチの幼稚園に入れてね！」

川嶋の横から櫛枝がビシッと親指を立てる。

「おう！ 櫛枝なら安心だ。」

またもや櫛枝に絶対的な信頼をおく高須竜児であつた。

「ふふふ。絶対、最強のフレイムヘイズに育ててみせるぜいー」

「こや、正直、それほ遠慮したい……」

「あ、そう? あとさ、大河の姿が見えないんだけど、どこにいるの

櫛枝は周りを見渡し、高校時代からの親友を探す。

「ああ。昼からずっと寝かせてる。そうだな、そろそろ起こすか。」

俺はゆっくり立ち上がり、店の奥へと向かう。

「フフフ。」

なぜか笑みをこぼす櫛枝。

「うお？どうした櫛枝？」

「いやー」あん、『あん。あまりにも高須くんがとつてもいい夫に見えたから、さ。』

櫛枝がそう言つた瞬間、胸の大きく脈打つのが分かつた。

「…………… もう なまえよ。」

俺は大河を起こしに行きながらさつきの言葉について考えていた。

夫……。

結婚してからずいぶん経ったが、『夫』と呼ばれるのは未だになれない。

その響きになれないまま『夫』から『父親』に変わるのだろうか。実際にミントが産まれれば形式的には『父親』になるのだろう。

だが俺は大河の『夫』として何かしてあげられただろうか。俺はミントの『父親』として何かしてあげられるだろうか。

俺は『父親』を知らない。

顔は知っている。

でも俺は普通の家庭のように『父親』と一緒に過ごしたことはない。

そんな奴がいい『父親』になるんだろうか。

俺は、俺の家族を幸せにしてあげられるだろうか。

俺は今、幸せだ。

これははつきりと言える。

でも大河は？

大河は俺と結婚して、俺が『夫』になつて、幸せだつただろうか。

これまで大河には多く迷惑をかけてきた。

今日、だつてお腹が大きくなつて動くのだけでも苦しいはずなのに店の手伝いをさせてしまつた。

俺は……こんな『夫』のままでいいのだろうか。
このまま『父親』になつてもいいのだろうか。

気づくと俺はすでに大河の部屋の前に到着していた。

楽しい同窓会にこんな暗い考えをしていてはだめだな、と考え心の奥に引っかかる。

とりあえずノックして大河の部屋に入った。

第一話「虎と竜、再び……」その都（後書き）

「いいやで読んでくれてありがとうございます。」

この一話は3つにわかれているので最後まで付けておいても構えると
うれしいです。

第一話「脱ヒート、弔ひーー」その続（漫畫也）

その2です
なんか龍巣とかキャラの壊壊してね?
とか思い今口の頃。

第1話「虎と竜、再びーー」その続

大河はやはりと詰つべきか、見事にお腹をだして寝ていた。

「まつたく……」

ちやんと腹だして寝るなつて言つたのに。

呆れながらも俺の顔はほころんでしまつた。

いつも通りの大河になぜだか安心してしまつ。

幸せそうな顔しやがつて。

わざまで悩んでいた自分が馬鹿に思えてくる。

しかしこつまでも寝顔を見つめているわけにはいかない。

体をゆすりて起こさうとするが大河はなかなか起きなかつた。

相当、熟睡してゐるらしく。

「おこ大河、もひ回窓会始まつてゐるぞ」

「う、うへん……。竜児の……竜児の……耳の穴から米が……米が、ほかの銀シャリが……」

どつかで聞いたことがあるようなフレーズだった。

ていうか耳から米つて……びつこいつ状況だよ。

俺はそんなびっくり人間になつた覚えはねえぞ。

「そんなこと言つてないで早く来いよ。あ、ちゃんと顔洗つてくるんだぞ」

「うるせー、この、バカ犬、……」

寝起きのため、罵声に勢いがない。

本当に寝起き弱いな、コイツ。

「ちゃんと来いよ。みんな待つてるんだから」

それだけ言つて大河の部屋を出た。

ちゃんと起きたかどうかは疑問だがこれ以上はやめておいた方が良いだろう。

これ以上やると殴る、蹴るなどの武力行使をされそうだ。

実際に前、寝ぼけて北村を殴つたこともあるしな。

いや、あの時は牛乳を飲んだ顔を近づけた北村が悪かったのか？

まあそんなことはどうでもいいんだけどな。

俺が同窓会の席に戻つて十五分後、大河も頭をボリボリと搔きながらやつてきた。

それはもう一瞬起きみたいな感じでだ。

「ふわああ。竜児、私の分の『飯、ちゃんと取つてあるんでしょ
うね』

来ていきなりそれかよ。

まずは久しぶりに会つたクラスメイトとかにあこせつとかするだろ、
普通。

一応、お前、クラスで結構人気者だつたんだからさ……。

そんなことを思いつつも、『うなる』と見越してしっかりと大河
の分は別に取つておいたのであつた。

俺は腰を上げ、大河の食事を取りに行こうとする。

しかし、

「うおおおおお、大河あああああああーー！」

といつ、まるで天の川によつて離れ離れになつた織姫と彦星が一年
ぶりに出会つたときに発するよつた叫び声が聞こえた。

あくまで俺のイメージだが。

別に俺の中で織姫と彦星のイメージが悪いわけじゃないぞ。

声がした方へふり返つてみるがそこには誰もいない。

そして俺の目の前を走りぬける奴がいた。

その姿はまるで赤い彗星……。

「うおおおおお、大河ああ会いたかつたよおおおお。」

赤い彗星の後をたどり、もう一度大河に目をやるとそこには大河に抱きつく櫛枝実乃梨の姿があった。

「み、みのりん落ち着いて……って、うわっ酒臭っ！」

「うおおおお、大河ああ元気にしてたかあ？？」「イツめえええ！」

いやお前、結構な頻度で店に来てるだろ。

ワシャワシャと大河の髪をなでる櫛枝。

その顔は彼女の髪の色とタメをはれるほど赤く染まっていた。

俺はゆっくりと後ろを向く。

そして今まで櫛枝が座っていた席を見る。

何本もの瓶ビール（もちろん空）がテーブルの上に散乱し、その暴飲に付き合わされたであろう春田のかわいそうな亡骸が横たわっていた。

「おい、櫛枝、お前いつの間にこんだけの量、飲んだんだよ。それ
にあんまり、」

「黙らつしゃいつ！大河は今私の物なのれすのよ！いくら高須くんでも私と大河のめくるめくめくめつくるんるんランデブーのお時間を邪魔する権利はおありにいやらにやくつてよ！」

「いや、もう何言つてるかわかんねえよ。しかも呪津も回つてねえ」

明らかに酔っている。

いつものネタに磨きがかかっている。

ていうか意味のわからなさがはんぱない。

支離滅裂だ。

そしてお前はあんまりにやんにやん言わない方がいい。

黒櫛枝とか呼ばれるぞ。

「こゝから酒を持つてくるのじや———今日は祭りじやー！がつ
ははははー！」

「 むーしけじや お今口せ飲みまへるー。 もうせやつちやんから
あまーすー！」

- 1 -

おい。

ちょっと待て。

今、元2 Cじゃない奴がいなかつたか？

「泰子、お前今日仕事は？あるつて言つてなかつたか？」

「そー思つたんだけどおー、なんかなかつたぽいんだよねー。魅羅乃ちゃんは今日入つてないよーで、店長が」

「で、早々に帰つてきたわけだ」

「うん、そーいうことなのですーじゃあみんな飲もー飲もーー！」

「だめだ、展開が速すぎでついていけねえ……」

それから何故か合流した泰子が元2 Cの男たちと飲み比べをして男たちを潰していった。

もちろん超ハイテンション（わりといつもだが）の櫛枝も酔い潰れるまで暴走し、男女問わず、からみ続けた。

泰子の男殺しと櫛枝の暴走で我が食堂には大量の屍だらけという大惨事になってしまった。

櫛枝が酔い潰れたあたりで同窓会はお開きとなり、元2 Cのメンバーはパラパラと帰つていく。

「じゃあたかつかちゃん。また明日ーー。」

最後の客、春田を見送る俺と大河。

「お前、酒とか飲んでないだうつな?」

「バカね!私がそんなことすると思つてんの?飲んでたら暴れてるわよ」

「それもそうだな。」

俺が大河と一緒に酒を飲んだ時の事だ。

大河は酔っ払い、暴れまわって一緒に飲んでいた俺はボコボコにされた。

それは例えるならば地獄……

てこうか地獄よりひどかった。

あんな惨劇は二度と起こしてはならない。

「一応聞いたんだよ。この子に悪影響だからな

そう言って俺は大河のお腹を優しく撫でる。

「ちよつ、何、いきなり触つてんのよーー!このエロ犬ーー!」

そう俺に罵声を浴びせていてそっぽを向く大河。

しかし店の窓に反射した大河の口元はかなり緩んでいた。

やはり大河も嬉しいのだ。

もちろん俺も嬉しかった。

大河のお腹の中には新しい命が宿つている。

俺と大河との子の命が。

それを考えるだけで俺は幸せな気分になってしまつ。

だけど幸せすぎて……

幸せすぎて……怖い。

こんなに幸せでいいのだろうか？

これが一時の幸せのようすで……

この後起じる不幸を暗示しているようすで……

そう思いながら少しつと後ろから抱きついた。

「なななななな何すんのよー」

「寒いだろ？ 暖めてやる」と思つて

即座に嘘をつく俺。

嘘と料理の腕だけは」の5年で急成長したようだ。

でも酔つ払つてないと出来ないな、こんなこと。

「……バカ

大河は抵抗せず俺の腕の中に収まってくれる。

小刻みに震えている俺の腕に気付いたようだった。

幸せすぎて怖いなんて贅沢な悩みだと自分でも思ひ。

不安を感じることなんて何ひとつないのに……

不安が「こみ上げて目から」ぼれ落ちそつになる。

我慢するために空を見上げた。

昔、大河と一緒に見上げた星空だ

「大河、北斗七星。あれがポーラー、オリオン……」

あの時と同じように正座をなぞる。

「ビン? オリオン座」

あの時とは違い、はつきりした声が聞こえる。

正座は時期さえ合わせれば時間がたっても全く同じ正座を見ぬ」と

が出来る。

でも人間はそうはいかない。

人間は常に変化していく。

もちろん人間関係も。

あの時は一人同じ場所で違う人を想っていた。
1年後は一人違う場所でお互いの事を想っていた。

今は一人同じ場所でお互いの事を想っている。

「来年は俺と大河とミントの三人で…この星を見よつな」

言おうと思つて出た言葉ではなかつた。

自然に出た言葉。

心からの言葉だつた。

俺は大河の方へ視線を落とす。

大河の目には俺が映つていた。

「……うん」

大河も頷く。

少しの沈黙が続き、俺たちは静かに唇を重ねた。

第1話「虎と竜、再び…」その式（後書き）

以上で読んでくれてありがとうございます。

次で1話終わりますです”ござります。

2は結構、ギャグが多かつたですが、3はシリアル重視ですかね。

第1話「虎と竜、再びーー」その參（前書き）

その3です。

これで1話がおわります。

読んでくれてる人ーーあと少しで1話が終わりますよーー頑張つて

!!

第1話「虎と竜、再び！－」その参

家に入った後、俺は風呂の準備をするため風呂場へと向かった。

長い時間、外にいたかつらなあ。

大河をさっさと風呂に入れて暖めてやんないと。

昨日、四八の高須流家事術の一つ、高須カビ殺しスターを風呂場のカビどもに決めてやつたから今の風呂場は異常にきれいだぜ。

軽く浴槽を洗い、お湯を張る。

お湯を張っている間、同窓会の後片付け。

あれだけみんなが暴れまわっていたので会場であるこの店はひどい有様となっていた。

幸い、窓が割れたり、コップが碎け散つたり、机が割れたり、春田が吊るされたりはしていなかつたので、後片付けにはそれ程、時間はかからなかつた。

後片付けが終わって風呂を見に行くとちょうどお湯がたまつたところだつた。

「おーい大河。風呂沸かしたぞ。先に入れよ

……。

「おい大河！大河てば！」

返事がない。

アイツまたコタツで寝てやがるな。

「つたく」

大河はよくコタツでうたた寝をしている。

どうせまた、いつものように寝ているのだろう。

リビングに辿り着くと大河はいつも通りコタツに横たわっていた。

ただいつも通りでないことが二つだけあった。

一つは大河が起きていたこと。

そしてもう一つは大河が苦しんでいたことだ。

「た、大河！！お前、大丈夫か！？」

「う・・・あ・・・りゅ、竜児？何か・・・もう・・・来たみ・・
たい」

今にも消えそうな声で大河は言つ。

「な、なにが…」

「陣痛」

「は？ だつて予定日にはまだ一ヶ月ぐらい早いぞ！ ただの腹痛じゃ……」

よく見ると大河はすでに破水していた。

状況はかなりヤバイらしい。

俺が何をすればいいかわからず、あせつていると不意に扉が開いた。

「ん、ん～……飲みすぎたあ～竜ちゃん、お水～、つて大河ちゃん！？」れつてまさか破水して…竜ちゃん、早く救急車を！！」

そういうと泰子は大河に応急処置をこなしていく。

その間、俺は全く役に立たなかつた。

しばらくしてやつてきた救急車に大河は運ばれて行く。

俺と泰子も救急車に乗り込んだ。

大河の手を握る続けることしかできなかつた自分の無力を噛み締めながら……。

十五分後、ようやく病院に到着。

やけに長い廊下を通り、

一体どこまで続くのだろうか。

もしかして永遠と続くのではないか？

その予想は裏切られ、ドアの前で制止する。

「ここから先は立ち入り禁止なのでこの椅子にお掛けになつてお待ちください。」

医者の言葉がやけに冷たい言葉に感じた。

「いやだ。俺も一緒に……」

一緒に、一緒に行かなきや。

俺は大河の『夫』なんだ！！

大河が苦しんでる時にのんきに座つてなんていられるか！――！
だから俺も一緒に……

「竜ちゃん。」

泰子が俺の肩を掴み、俺の進行を阻む。

振り向いて反論しようと口を開くが、

「落り着きなれ。」

とまた泰子に阻まれる。

その言葉を聞いてようやく頭が冷えた

俺はゆっくりと大河の手を離す。

「よろしく…お願いします。」

今の俺になれしか出来ない。

これしか…出来ない。

「最善を尽します。」

やつこいつと医者は手術室に消えていった。

何分経つただろうかよくわからない。

落ち着くために缶コーヒーでも買ってくるかと思い、立ちあがった時にちょうど医者が手術室から出てきた。

「産まれたんですか？」

俺は歓喜混じりの声で聞いた。

「それが大変申し上げにくいのですが…奥さんが意識不明の重体でお子さんもまだ出てきておりません。なにぶん破水と出血が多く、しかも奥さんは体が小柄なので出産するまでもつかどうか……なので最悪のケースを考えておいてください」

頭を金槌で殴られた気分だつた。

視界が揺れる。

吐き気がする。

天と地がひっくり返った気がした。

同時に俺の中でブチッと何かが切れる音がする。

気づいたら医者の胸倉を掴み、壁へ叩きつけていた。

「竜ちゃん。落ち着きなさい。」

泰子が俺の後ろから俺を止めようと声をかけたようだが、俺の頭はそんな言葉を理解できる状態になかった。

そのまま腕に入れる。

「つるせえええ！あんた、医者だろ？だつたら何とかしろよ！…そのための医者だろ？…もし大河とミントになんかあってみろ！…

そんときは……

ただじやおかない、と言ひかけた時だつた。

不意に後ろから強い力で引っ張られた。

そして頬のあたりでバチンッと何かが弾ける音が聞こえた。

最初はなにが起つたか、全くわからなかつた。

また俺の中で何かが切れたのだろうか？

いや違う。

泰子が俺にビンタしたのだ。

叩いたことは一度もなかつたのに。

「竜ちゃんーあなたがそんなことでどうするのー落ち着きなさいーー」

「え？……あ……。」

不意に抱きつかれ、頭を撫でられていた。

昔、泣き虫だった俺によくした行為だ。

「大丈夫、大丈夫だから。大河ちゃんとミントちゃんは絶対に死ない。それとも竜ちゃんは大河ちゃんたちが死ぬと思うの？」

そう……だな。

そうだよな。

柄にもなく熱くなつていたことと気が付く。

「口メン」

泰子に謝る。

やつぱり泰子はいい母親…スーパーお母さんだ。

泰子の息子で本当によかつたよ。

「すいません。取り乱しました」

医者にも頭を深々と下げ、出来るだけの謝罪をした。

「いいんですよ。」こんな場面だつたら誰でも取り乱しますから…。
あなたはとても奥さんを愛していて、いい旦那さんですね。」

「はい」

即答した。

即答できた。

その時の俺にはもう照れなんでものはなかつた。

俺の返事を聞くと医者は軽く頭を下げ、また手術室に入つていつた。

待つ。ひたすら待つ。

1分が1時間に感じられた。

今、どのくらいいたったのだろう？

果てしなく過ぎて行く時間。

永遠にこのままなのだろうか？

永遠に待ち続けなければならぬのだろうか？

永遠にこの苦しみが続くのだろうか？

そういうば何かの小説に『始まりがあるものは全て終わりがある。』とか書いてあつたな……。

この苦しみにも終わりが来るのだろうか？

もう俺の精神は限界に達していた。

発狂しそうになつた時、不意に『手術中』のランプが消えた。

れつせきの医者が出てくる。

俺は期待の眼差しを医者に送つた。

しかし医者は黙つて首を振つた。

最悪の結果となつたのだ。

目の前が真っ白になつた。

その後の言葉は耳を通るだけで理解は出来なかつた。

この日、小さな星は光を失い、逢坂大河あらため高須大河は死んだ。

俺の頬に涙は流れなかつた。

第1話「虎と竜、再びーー」との参（後書き）

1J1Jまで読んでくれてありがとうございます。

終わりました、1話。

どうだったでしょうか。

感想とかくれたら嬉しいです。

褒められたらのびる子ですので…（チラッ

あと大河ファンの方、誠にすいませんでした。

第2話「From大河」その壱（前書き）

ども、不幸男です。

2話は2部構成です。

もっとギャグを入れたいですねwww

第2話「F・T・O三河」その壱

気づくと俺は真っ暗な空間の中にいた。

前が見えない。

ここは……何処だろうか？

よくわからない。

どうやってここに来たのか、なぜここに来たのか。

いくら考えても答えは出なかつた。

気持ちが…悪い。

吐き気がする。

何故かはわからないがこの空間に長く居たくなつた。

出口を探そう。

そう思つて前に踏み出した瞬間、地面の感触がなくなつた。

落ちる………?

瞬間的に思うて何かにつかまつて手を伸ばしたが、俺の手は空を切る。

今度こそ落ちる…。

そう思ったがいつまでたっても固い地面は現れない。

それ以前に重力にひっぱられている感じがしない。

無重力の中に居るようだった。

しかし落ちない代わりに体を動かしても前に進まなかつた。

どうしようもなく途方に暮れていると突然、目の前に小さな星が現
れ、輝き始めた。

小さな星……。

見覚えはあつた。

見覚えしかなかつた。

忘れもしない。

あれは大河が送ってきた写真の星だ。

自分にそっくりだったから送った、と大河は俺を殴りながら（きっ
と照れ隠し）教えてくれた。

大河……。

星を眺めていると突然、光が弱くなつた。

どなんじんしほんでいく星。

待つてくれ！！

星に手を伸ばすが届くはずもない。

頼む！！行かないでくれ！！

俺は、俺はお前がいないと……

大河！！ 大河！！ 大河！！

手で宙をかく。

星に向かつて進むために。

でもやつぱり体は前に進まない。

少しでも前に進もうと手足をばたつかせていると、急に息が苦しくなった。

手足の動きが止まる。

瞼が落ちていく。

意識が遠のいていく……。

たい……が……

「あ～やつヒパパ起きた！」

田を覚めるとミントーが俺の腹の上で胡坐をかいていた。

腹の上に座るな。

苦しい。

……。

あれ？

そういえば、いま苦しくない？

ミントーが乗っただけでここまで苦しくなるものなのかな？

いやそんなはずは…

ん？

「……ムグツ……」

喋れねえ！――！

てこりか息が出来ねええええ――！

それもそのはず、口にはガムテープ、鼻にはお花の形をしたクリップが……

うん、華があつていいね。

などと頭がおかしくなるくらいの酸欠状態に見舞われ、もう一度夢の彼方へフライアウォーイしそうになる。

「ンンン……ンングンンンンン……（＝ントーー早くこれを取れ！…）」

「はいはい」

いや、今までわかつたのかよ。

読心術の心得でもあるのか？

いやいや会得させた覚えないから。

ミントがクリップを外し、ガムテープを剥ぐ。

「痛つ」

勢いよく剥いだため、髭が抜け、ガムテープの粘着部分が砂場に落した磁石みたいになつていた。

「痛つてえ。……」一いら。こんな」としたらダメだろ

「えへ、だつてこの前、亜美ちゃんが人は息が止まつたら起きるつて言つてたよ。それで今度、パパで試してみなさいつて」

あの野郎。

子供になんてこと教えてんだ。

危つく死にかけたぞ。

折角、続編始まつたのにもう終わりとかシャレになんねえ。

「それいうなされてたから起こしてあげたんだよ。褒められてもいいくらいなのになんて怒られなきやいけないの……！」

頬を膨らませ、むくれるミント。

「おお。そりや悪かつたな。ありがと、ミント。でも今度からはしちゃダメだぞ。逆に田を覚まなくなつちやうかもだからな……」

ミントの頭をくしゃくしゃと撫でる。

ミントの顔はすぐにむくれ顔から満面の笑みに表情をシフトした。

こんな笑顔されたらなんでも許しかやつよな。

通称人殺しの田を持つ親バカがここにいた。

大河が死んでから5年。

ミントは無事5歳の誕生日を迎えた。何の後遺症もなく元気な女の子である。

まあ元気すぎるくらいだが。

顔は大河似で髪は黒のロング。

性格は活動的で攻撃的。

……誰に似たんだか。

そして残念なことに……睨んだ時の田は俺、そつくりだった。

睨んだだけで人を殺せそうな……

あれ？ これ俺よりひどくないか？

「パパー、あーさーーーはーん！」

「わかった、わかった。だから俺にぶら下がるのをやめる

もちろん俺の言つことを聞くはずもなくミントはそのまま俺の首にぶら下がっていた。

昨日見た動物特集番組に出ていたコアラの親子のようだった。

決してナマケモノではない。

愛らしき「アラの方だ。

まあ「アラも結構、 猥獈らしいが。

俺は……まだ涙を流していない。

お通夜のときも葬式のときも火葬のときも納骨のときも今も……。

俺の時間はあのときに止まつたままだつた。

大河の部屋も櫛枝や川嶋が時々掃除に来るくらいで、ほとんびそのままで保管してある。

全く何も変わらないままだつた。

部屋も俺も。

あれから変わったこともある。

川嶋が店に通り抜けになつた。

少ししゃべつて酒を飲むだけだがそれだけで心が楽になれた。

川嶋も俺も。

ミントを首から振り落とし、台所に立つ。

「アラリハセヒ」までだ。

そういえば昔、雑誌に「公所に立つ男はモテる」と書いてあるのを見た時は柄にもなくテンションが上がってしまったのを覚えている。もちろんこれは嘘っぽちであり、毎日公所に立っている俺は全くモテなかつた。

何が悪かつたんだろうか……

そんなびひょくもない悲しい事実を再認識しながら朝食を完成させた。

本日の朝食はハムエッグ。

正にトト朝の洋食。

これに食パンとコーンスープが付いたら完璧だつたな。

「ほーら!! ント。ハムエッグ出来たぞ。」

「うわあ！ ハムエッグ、ハムエッグ、ハムエッグ！」

無駄に喜ぶ!! ント。

それを見て喜ぶ俺。

白状すると俺は典型的な親バカである。

見ていてわかるほどの親バカである。

そしてハムエッグでテンションあがつたのはわかるが、買ったばかりの新品机にナイフとフォークを突き立てるのをやめてくれ…

「熱いから気を付けるーて、あ、でも急いで食べろよ！幼稚園遅れちまつー！」

時計を見ると針はいつもの時間より10分も早い時間を刻んでいた。

とこつか普通にペンチ。

「それは私のせいじゃないもん！」

愛娘に痛いとこをつかれる父親がそこにはいた。

俺は櫛枝との約束通りに櫛枝が勤めている幼稚園にミントを入園させた。

現在通称みのりん先生が我が愛娘の担任である。

櫛枝には俺が店でミントをビーフしても見ることが出来ない時、遊んでもらつたりしている。

時々店の方も手伝ってくれてるので正直、申し訳ない気持ちでいっぱいなのだが、快く引き受けくれるのでいつも甘えてしま正在。

今度、お礼にオレンジのケーキでも作ってプレゼントしちゃつか……

未だに起きていこなじ泰子の分の朝食にラップをかけてこる時、非常に重要なことを思って出した。

「… うてインゴちやんに」「飯をあげてねえ」

家族の一員であるインゴちやんに「飯をあげるのを忘れるといは…

「おーーインゴちやん。」「飯ですよー。」

我が家の一員であるインゴちやんはまだ健在だった。

やつぱりインゴも蝶らなによつは蝶つていた方が長生きするようだ。

春田が毎日欠かさずインゴちやんと蝶つっていたおかげかな。

余計な言葉を覚えなきやいいが。

「の前インゴちやんが「シントトレオシー・シントトレオシー」と言こだした時は発狂してしまった。

インゴちやんの未来が心配だ。

まあどう転んでもクリスマスの我が家の食卓には並ばないから安心してくれ、インゴちやん。

「パパ～遅い～！」

これまた誰に似たんだか知らないが食べる量とスピードが半端じゃない。

つてちょっと待て俺の分まで食つてるじゃねえか。

俺のハムエッグ……。

「うおおおおおおお！」

只今チャリで爆走中。

もちろんすれ違う人、すれ違う人に奇異の目を向けられたが気にしない。

途中、誘拐と間違えられて警官に追いかけられたが気にしない。
小さいことは気にするな！――！

めげるな俺！――！

トンボも真っ青になるくらいの速さでペダルをこじら続ける。

俺も自転車にプロペラをつければ空くらい飛べるかもしれないな。

ところが、これぐらいこげれば鳥人間コンテストも夢じやない。

いいね！いい人生だよ！

「キャハー！いつもよつはやーーー！」

後ろでのんきに笑うミント。

遅刻寸前でよく笑つていられるな。

……鳥人間コンテストとか考へてた俺が言えることじやないか。

そしてよつやく幼稚園到着。

「おお！高須くんにミントちゃんではないか。おはよーーーいつも
より遅めだね？」

「おはよー。みのりん先生！だつて今日、パパがねぼーしたんだも
ん」

それを言つてくれるな、我が娘。

「おーおーそれはいけないぜ高須くん。早起きは三文の得だよ？三
人寄れば文殊の知恵だよ？」

おひ。

遅く起きたら朝御飯なくなつちまつたよ。

俺のハムエッグ……。

あと三人寄れば文殊の知恵は意味違うからな。

三人集まつても早起きは出来ないからな。

「おう。今日はちょっと嫌な夢、見ちまつてな」

本当に……

ただの悪夢。

「やうだつたのかーならば」の不道、みのりん先生がカウンセリン
グしてあげよーー！」

そう言つて櫛枝は腕や手、指をそれはもつ気持ち悪いぐらにウネ
ウネと動かした。

何だ、その踊り……

ペテン師にしか見えないぞ。

それとも俺のMAYでも下げよーとしているのだらうか。

「あ、おう。機会があったら今度な。それじゃあミントを頼む

「つむつむ。それではミントちゃんは任せてい、高須くんはしつかり
と働いてきなさい」

夢に出てきそうな踊りをやめ、自らの職務に戻る櫛枝。

今日も悪夢決定だな。

「三ヶ月で先生のことが聞くだぞ」

「わかつたから早く行つてよ――ちう――！」

怒られてしまつた。

愛娘に怒られて若干へこむ俺。

若干は嘘です。

本氣でくじみました

第2話「From大河」その壱（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

ギャグパート終了です。

次はシリアスパートです。

うつむ、文章力がほしい。

第2話「エーロ大河」その続（前書き）

その2です。

2話終わっちゃいますね。
んーもつと頑張らなくてはーー。

第2話「F・T・O・M大河」その弐

その日の夜、突然川嶋と櫛枝が訪ねてきた。

「おひ。 どうした、お前ら？」

居間から店の方へ出て迎える俺。

「うん、ちょっとね。 それより高須くん。 ミントちやんは何処に？」

「ああ、ミントなら居間でＴＶ見てるぞ」

俺の言葉を聞いた瞬間に走り出す櫛枝。

家中を猛ダッシュ。

もつそれは世界一有名な配管工がするダッシュのそれだった。

でもここ一応飲食店だからな。

しばらくしてミントの悲鳴と笑い声が聞こえてきた。

何が起こったか、大体予想できる。

櫛枝が後ろから脅かしていくすぐりでもしたのだろう。

「高須くん。」

急に川嶋が話しかけてきた。

現在、店の中には俺と川嶋しかいないので話しかけてくるのは当然だろう。

だが俺はあまり川嶋と会話をしたくなかった。

何を言われるか予想できるからだ。

俺は沈黙で会話をすることを伝える。

「明日、……でしょ？でも明日はビデオしても撮影抜けなさそうだ
ったから今日あいつとお参りに行つてきたの。今はその帰り」

俺の沈黙に構わず続ける。

「だから明日はミントちゃんと一緒にお参りいってね。」

心臓が大きく高鳴る。

同時に胸のあたりがギュッと締め付けられるように痛くなった。

それでも俺は声を発さない。

川嶋もわかっているのだ。

だから俺の返答を待たず続ける。

「高須くん、タイガーの『』と、『』と喋ったことないでしょ？」

タイガー。

川嶋が大河を呼ぶときに使つあだね。

もつ締め付けるとこりう表現では足りないほどに胸が痛い。

「この前私に聞いてきたのよ。『ママってどついう人だったの？』って。それでパパに聞いたことないの？って聞いたらなんて言つたと思つ？」

「……なんて、言つたんだ？」

自然に聞いてしまつた。

あつけなく沈黙を破つてしまつたことを悔やみながらも川嶋の言葉に耳を傾ける。

「『パパはママの話、してほしくないみたいだからパパには聞けないの』って。高須くん、娘にまで氣を使われるんだよ？どこまでわかりやすいのよ……」

「そんなに、わかりやすいか、俺」

「何言つてんのよ。わかりやすいに決まつてるじゃない。一目瞭然

よ。何しても、心ここに非ずみたいな感じじゃないの

心ここに非ず、か。

たしかにあの日から俺は何かを感じる心をなくしてしまったのかもしれない。

俺は本当の意味で笑つたり、感動したりしていなかつた。

そんな俺が涙など流せるわけもない。

今の俺が持つてているのは虚無感だけだつた。

そんな奴が迷惑かけずに生きていくるわけがない。

俺は知らず知らずのうちにいろんな人に迷惑かけ、気を遣わせてきたのだ。

最低だな、俺。

「ゴメン、川嶋。お前にもたくさん迷惑かけてるよな

「別にいいわよ。だつて私達、対当の存在でしょ？」

「俺よりちょっと前を進んでるんじゃなかつたのかよ

思わず笑みをこぼす俺。

「う、うるさいわね。いちいち細かいのよ、高須くんは！」

頬を膨らませそっぽを向く川嶋。

「はは、悪かつたな」

しばらくの沈黙の後、

「……あらがとう。川嶋」

川嶋の気持ちに素直に感謝した。

今なら涙を流せるかもしねないと思つてしまはうく待つたが俺の頬は渴れたままであった。

次の日、俺とミントは大河の墓に行つた。

電車の中では会話がなく、外では小雨が降つてゐる。

墓参りに行く時はいつも会話がない。

確かにミントにも気を遣わせてしまつていたようだ。

「ごめんな、ミント。」

電車がブレーキをかける。

目的の駅に到着したのだ。

何も考えない。

何も感じない。

何も流れない。

機械のようにおおつむ準備を整えてこく。

駅を出る頃には小雨は止み、雨上がり特有のモヤモヤとした湿気が俺とミントを襲った。

不意に昔のくせで前髪をいじる。

「この癖をやめたのはいつだつたうづか？」

駅から5分歩いたところに大河の墓はあった。

大河の墓の前で立ちつくす。

やはり涙は流れない。

「立てば今度は流れると思ったのに。

「パパ…私、何をすればいい？」

俺の袖を引っ張りながらミントは不安そうな顔で尋ねてくる。

「口初めてミントが発した言葉だった。

「もう…だな。じゃあこのバケツに水をくんできてくれ

ミントは静かに領き水道がある場所を探しにいった。

「大河……」

妻の名前を口に出す。

しかし俺の頬は渴れたままだつた。

諦めてとりあえず線香を探す。

確か川嶋が線香はまだ残つているって言つてたな。

「な、あいつらちゃんと整理して行けよ

墓の横についている石箱を開けると中で線香がバラバラに散りばつっていた。

「あーもうー我慢できねええ！」

これが悲しい主夫のさがなのだろうか？

などと思いながら線香を片付けていたらその中に小さな便箋を見つけた。

去年来た時にはなかつたはず。

川嶋たちが置いていったのだろうか？

手にとつてみたら宛先は高須竜児様になつていてる。

どこかで見たことのある筆跡だった。

裏には F r o m 大河と書いてある。

頭を金棒で殴られたかと思った。

それほどの衝撃が体を駆け巡る。

そつ。それは散々みてきた大河の字であった。

手紙には中身はしつかりと入っていた。

今度はちゃんと入れれたらしい。

北村の時みたいに入つてないかと思つたぞ。

少しは成長したんだな。

中にはこう書いてあつた。

竜児へ

結婚5周年おめでとう！

今は3人家族だけでもうすぐ4人家族ね。

まあミントの目がアンタに似てないことを祈るわ。

ああ考えただけでもおぞましい。

結婚するまで竜児とは色々なことがあったわよね。

ラブレターの入れ間違いから私たちは始まった。

北村くんへの告白、

ばかちーとの水泳勝負、

ばかちーの別荘、

完全優勝した文化祭、

私が自分の気持ちに気付いた聖夜祭、

竜児が私の気持ちに気付いた修学旅行、

一人の気持ちが繋がったバレンタイン、

一人で逃げようと誓つた駆け落ち、

竜児との初めてのキス……。

私の胸にはあげだしたらきりがない程の思い出があふれています。

つりこじとめたくせんあつた。

でも今は全部ここ思って出だつたとゆつてくるわ。

その思って出の中心にはこつも……竜児、あなたがいた。

あなたのせいで傷付いたこともあつた。

でも樂して思って出の中にも必ず竜児がいる。

竜児が全部樂しい思い出にかえてくれる。

だからこれから一緒にたべるの樂して思って出を……

いや、やつひやんと私と竜児といれから生まれてくるマント、全皿でひねから樂して思って出をたべると、たべると作つてこまつよ。

それ以外、私は何も望まない。

だから……

だからね。

竜児。

これからもずっと……ずーと私の駄犬でいなさい。

高須大河より。

P.S. 読んだらこの手紙はすぐに捨てなさい。絶対だからね。
でないと殺すわよ。

「パパ……泣いてる?」

いつの間にか水を汲んで戻ってきたミントが俺を見上げている。

俺は不意に話かけられてかなり驚いた。

いや正しくはその発せられた言葉通り、涙を流していたことに驚いた。

ぼろぼろと頬を流れ落ちる涙はそのまま川にでもなるか、という勢いだつた。

虚無感は風船から出でていく空気のように俺の心の中から消えてしまっていた。

そのかわり悲しみが俺の心を満たす。

大河が思い描いていた未来は永遠に失われてしまった。

そう考えるだけで凄く悲しい。

胸の上に漬物石でも乗つけられたかのようだ。

「パパ、 大丈夫？」

ミントが俺の袖を引っ張る。

俺はそのままミントを強く抱きしめた。

「パパ……どうしたの？どこかいたいの？」

そうだよ。ひとつでも心が痛いんだ。

「じゅりゅーのままで……いてくれないか？ そしたらパパ、泣きやむからね。ほんのちょっとだけ……」のままだ。

そういうた俺に従つてミントはそのまま抱きしめられていた。

「んなに泣くなんて思つてもみなかつた。」

こんななんじや父親失格だ。

しばらく泣いて5年間、貯めこんだ感情を一気に吐き出した後、大河に線香をあげた。

墓の前で手を合わせて静かに田を閉じる。

大河

ごめんな、

今までお前の死と向き合えなくつて。

それで多くの人に気を遣わせてしまった。

でもこれからはもうちょっとあるよ。

絶対にやさしくなる。

だからこれからはお前の事、少しあつ話してこい。うれしいだ。

最初はお前の話をするとたびに泣くかもしれない。

いやあ、泣くだらう。

でも少しあつ、

少しあつ、ひとつと泣いてこくよ。

お前の事。

そうだな、最初はお前がすぐえでじだったってことから始めるよ。

ラブレターを入れ忘れたとか塩と砂糖を間違ったとか、そんなこと。

お前のドジ伝説なんてありすぎて一生喋っても伝えきれないかもし
れないけど…

ちゃんと伝える。

一生かかっても必ず伝える。

だから安心してくれよ、大河。

俺はもう……大丈夫だ。

そう大河に伝えて俺は目を開けた。

「帰りうか、ミント」

ミントは俺の手をそつと握る。

「うそ

ミントは俺の手をそつと握る。

そして俺たちは互いに身を寄せ合ひ、帰路についた。

次の日、店にやつてきた櫛枝と川嶋に手紙の真相を聞いてみた。

実はこの手紙、この前川嶋たちが大河の部屋を掃除していた時に見つけたそうだ。

手紙はタンスの奥深くに封印してあつたのだと櫛枝は言つ。

それでどいつやつて渡すか川嶋と相談した結果、これは俺自身が見つけないといけないという結論になつたらしい。

それでわざわざ嘘までついて前田に墓参りに行き、手紙を仕掛けた
というわけだ。

本当に遠回しな二人だよな。

でもとても感謝している。

大河の死と向き合つことが出来たし、

ミントのためにこれから頑張ろつて決心できた。

大河……これから一緒に思い出を作っていくことはできなくなつた
けど、絶対俺がミントを幸せにする。

そんでもって俺も幸せになる。

だから……。

大河。
だからな。

これからも俺たちをずっと、ずーと見守ってくれよな。

第2話「エーロ大河」その続（後書き）

「いやあで読んでくれてありがとうございます。」

なんか最終回っぽくなつちゃいましたが終わりませぬよ?
これからも頑張ってこまおしゃい!!!

第3話「バースデープレゼント」やの巻（前書き）

3話その巻です

3話も2部構成です。

泰子の無邪気な姿に注目。

第3話「バースデープレゼント」その壱

墓参りの次の日。

午前中はミントと一緒に大河の部屋を片付けていた。でてくる、でてくる「アハ」、服、雑誌類、思い出の品、涙、鼻水。最後から一つは聞かなかつたことにしてくれ。

大河の衣服類はほととぎミントのためにひとつおべりとした。

大河のサイズは「存じのとおつとても小さいのでミントもすぐに着られるようになるだろ?」

部屋の片づけも一通り終わり、午後に開催されるミントのドキドキプレゼント選びに向けて昼食をとる。

「ミント、なんでそのマフラーにこだわるんだ? そのマフラーはもうアハアハだからあんまり手触りよくないだろ?」

部屋の掃除中、ミントが大河の持ち物で特に気に入ったのは俺が大河にあげたマフラーと大河愛用の木刀だった。

正直、木刀を手に取った時の笑顔を見た時、血つて怖いな、と実感してしまった。

もちろんそんなものを部屋から持ち出させるわけにはいかなかつたので置いてさせたが。

「うん。でもこれがいいの。なんだかいにおいがするし、落ち着くから……」

「あー、多分それママの匂いだな。よくつけたし」

しかも鼻水ついたとか言ってたし。

「これが、ママの匂い?..」

巻いているマフラーに顔を埋めるアントン。

ああその格好よく大河がしてたな……。

その姿を見ていると、急に視界が悪くなつた。

「あっ。ちよっと俺トイレ……」

「食事中なのに……もう……」

ショウがないだろ。

顔をうずめる姿があまりにも大河に似てるもんだから……。

顔を洗い涙を拭いて洗面所を出るとちよつと泰子が起きてきたところだった。

「りゅーちゃん、お腹へつたあ~」

じへつになつても子供のよつである。

まるで大供だ。

ちなみに今年で44歳。

本家大供さんは39+1歳だったか。

「今日は泰子の好きなオムライスだぞ。」

「名前は？」

鼻息荒く尋ねてくる泰子。

どんだけオムライスの名前に執着してんだよ。

前は書いてなかつただけで大泣きしてたし…

「書いてるよ」

もちろん前のように泣かれでは困るのでしつかりと赤い文字で『やつちやん』と書いておいたのだった。

そういうえば赤字で名前書いたら呪いがかかるとかなんとかつていう都市伝説があつたな。

ケチャップはセーフなのだらうか？

「わ～い！ ありがとー竜ちゃん！」

俺にお礼を述べると、ものすくこスピードで走り去る泰子。

廊下は走るなよー。

…つて、俺は泰子の先生かよ。

と俺は冷静に自分へシッコミを入れてしまった。

俺はこんなかわいそうな奴だつたか？

昼食後、俺たちは昨日すっかり忘れていたミントのバースデープレゼント（あの後、服がほしいといったので服に決定）を買いに町へと出かけた。

「遅い」

時計台の前から人気女優とは到底、思えないほどの形相でこちらをにらんでくる女性が一人。

もちろん知り合いに女優なんて一人しかいない。

時計台の前にいた元人間、現鬼にとりあえず謝ることにした。

「ゴメン、川嶋。あとでアイスおごるからとりあえずいいは許してくれ。」

「女優にアイスおごるつー…どんな神経してんのよ、あんた。…もううづけだ。」

もりつかよ。

案外ちょろい人気女優だった。

心のバリケードが小学生低学年レベルだ。

川嶋、知らない人がアイスくれるって言つてきてもついていつちゃダメだぞ。

「なによ。人をかわいそつな奴を見るような目で見て…。私、食べてもおいしくないわよ」

「食つか！人をなんだと思つていやがる…！」

「異常性癖者」

即答だつた。

ひどいいわれようだな、おい。

「亜美ちゃん！」

ミントが川嶋に猫撫で声で近付き抱きついた。

「おー。ミントちゃん、今日は何の服、買おつか？」

今日、川嶋に来てもらつたのはもちろんデータとかそういう浮つた思いからではなくで、ミントの服を選んでもらつたためである。

何を隠そうミントの服はいつも川嶋コーディネートだ！

「ermenな、ミント。

女の子の服とかわからねえ……。

それにこの前、女の子の洋服売り場にいたら通報されたからな……。

どこつもここいつも俺を異常性癖者扱いしやがって……

まあ川嶋と一緒に通報なんてことはならないだろ?!

「今日はね、今日はね! 帽子とワンピースとズボンと手袋と靴下と靴と……」

俺にはほとんどどく呪文にしか聞こえないようなスピードで数々の商品をあげていった。

それはもうひ遠慮なし……

その呪文のせいで俺は胃がキリキリなるだ。

これ以上俺の胃にバギクロスをかけないでくれ……

「まてまてまてまてーウチを破産させるかー?」

「別にいいじゃない。愛娘のためよ? お金だって使われて本望なはずよ、ねー? ひびちゃん!」

「ねー!」

ねー、ておい。

意氣投合してんじゃねえよ。

ウチばびんぼーなんだよ！

お前みたいな売れっ子女優とは違つてなーー！

「無理に決まつてんだろ。嫌だぞ、俺は。ずっと三食パンの耳だけとか……いや一夫すれば……無理だな」

「じゃ、決まりね。取り合えず服は……3階ね。」

「3階へレッジパーー！」

サクサクと進んでいく川嶋とミント。

「てか俺の話をきかええー！」

心の中で愛娘に向かへつつの全額使つことを覚悟した父親がここに立つた。

第3話「バースデープレゼント」その壱（後書き）

「」まで読んでくれてありがとうございます。

川嶋さん、アイスとか食べちゃつていいんですね？

脇腹とか腕とか…あ、はいすこませんでした」「みんなそこ許してください。ださい。

第3話「バースデープレゼント」の話（前編）

3話のその話です。

子供の可憐さを頑張ってだしたいですねー

第3話「バースデープレゼント」その続

川嶋とミントを追つてエスカレーターで3階に直行する。

その途中で見事、北村一家にでくわした。

実は北村一家とここで待ち合わせしていたのである。

…嘘である。

全くの偶然です。

会長（今はP-T-A会長）がこちらに気づき、

「おお。高須じやないか。何をやつてゐんだ？」

と声をかけてきた。

やべえ絡まれた…。

「こ、こちよつヒントに誕生日プレゼントを、と頼こまし…」

やつぱ念としゃべるのほ緊張するな…

「それならば一緒に見てまわるひじやないか。」ソレであったが百年田だ！」

会長に続いて北村もひびく氣づく。

いつなつたらひづ逃げられない。

まあ会長に見つかった時から逃げられなこのは決まってたが…

「北村、それって大抵、敵キャラが言つセリフじやないか？しかも十中八九負けるヤツの」

やられ役ともいづ。

「ハハハハ！ やつともこつな！」

今田もテンション高いな。コイツ。

へそくり全額パーという絶望を味わいそうな俺にはとても頭に響く
テンションだ

でもそこが北村のいいところだもんな。

「おい高須。あんなところに試食コーナーが…ちょうど腹が減った
ところだったんだ！行こう行こう！」

前言撤回。

少しだまれ。

いい歳こいて試食コーナーを漁るな！！！

試食するために何周も回つてれば、『あ、同じ人だ』ってなるに決
まってんだろうが…！

そんなこともわからずにそれを行つていいのは小学生までだ…！

「そして俺を引っ張るなああああ！」

あと一階で服の階に行けるのに…。

万事休すか！？

俺が一生懸命、北村を振り切つている間に会長の足元から子供が二
人顔をだした。

一人は男の子、もう一人は女の子だった。

「はあ。なんでコイツとまわん起きやなんだよ…」

男子の方が溜息交じりに愚痴をこぼす。

この子が会長と北村の双子、その一人。

名前は北村蓮。
きたむられん

何かとよくミントと張り合つ負けず嫌いな男の子だ。

「うるせーこのバカ蓮があー！」

それに対しても負けず嫌いな我が娘も負けでいいない。

「一ヤハハハ～！今日も仲が良いねえ。つばきちゃん関心感心カン
シンだよ～」

女の子の方が高らかに笑う。

この子が双子の片割れ。

名前は北村椿。
きたむらつばき

北村をそのまま女の子にしたよつた感じの子。

テンションだけはいつも高く、言つてることが時々よくわからな
い。

蓮とミントの喧嘩がヒートアップしていくと大体この子が止めてい
る。

いわゆる仲裁役。

よつやく北村を振り切ると蓮とリントが言い争っていた。

それを椿が仲裁している。

子供たちは相変わらずだなー…

「やつじえぱ高須」

唐突に会長が話しかけてきた。

よつやく北村を振り切ったのに次はあなたですか、会長。

わづ、やめてくださいよ。

あなたが唐突に話しかけてくるたびにいつまほ寿命が一年ずつ縮まつてゐるよつて感じるんですから。

などとは口が裂けても言えない。

もし言おつもんなら「おこ、剣道部。竹刀を持つて」となつて教室乱闘パーティーが始まつちまつ。

「今度の運動会、お前は保護者の競技でるのか?」

「え?」

俺の全く知らなかつた情報が会長の口から発せられた。

「そーだぞ！ 高須！ リレーだぞ！」

そんなに拳を握つて力説されても…

「それって… いつあんだ?」

俺は内心、かなり動搖していた。

なんてベタな言葉が似合ひほや動搖していた。

しゃ
本当に

すこく嫌な予感がするんだが

「……1週間くらい前は鬱からお知らせのハントかいって思ってたんだが、

そんなプリントは貰つた記憶がない。

つーとせ

卷之三

「バレたか！」

一 ハレたか、じやない！」

つたぐよ。

誰に似たんだか。

そんなどうまで似なくていいの!!…

……。

まさかな…

「ミント、まさかとは思つがそのパソコンで紙飛行機作つて窓から飛ばさなかつたか?」

「まさか見てたのー?」

完全に血をつかつてやがんな。

どこまでも似てるんだよ。

「まあ俺のほうが飛んでたけどなー。」

蓮が誇らしげな顔で言い張る。

「いやあー私が一番だつたでしょー!」

それに負けじと椿も張り合つた。

しかしそんな告白を聞いて会長が許すはずもなく…

「お前、ひ…せっせつ飛ばしてやがつたなー!」

「ヤバー!」

次の瞬間、会長の手から皿にも止まらない速さでチョップが繰り出された。

「ひつたーい！」

さすが双子。

全く同じタイミングで痛がる。

双子は片方がダメージを喰らいつともう片方もダメージを喰らいつって言うのは本当だったのか。

まあ会長は両方攻撃したけど…

「つたぐ、どおりでで折り目が付いてるわ、砂まみれだわの散々な状態で…しかも椿しか持つて帰つてこなかつたわけだ」

やれやれと溜息をつく。

「それはそうと高須、今日は亞美とデートなのか？」

「違う違う。だから今日はミントの誕生日プレゼントを買ひに来たんだつて。川嶋とデートなわけないだろ」

「デートだなんてそんなこと言われたら川嶋も怒るだろ。」

それに入気女優とデートなんでしたらきっとファンの人々に殺されちまう。

「そこまで否定しなくてもいいじゃん…」

「ん?なんかいつたか?川島。」

「別に…聞こえなかつたんならいい。」

ん?

なぜか川島は急に不機嫌になつた。

なんでだ?カルシウム不足?

ああ、ずっとほつとかれたからか。

後でアイスたくさんおじいてやうなきや後が怖いぞ。

「では高須に亜美、それとミントむちゃん…わらばだー!ハハハ。」

どでかい笑い声を発しながら去つていいく北村。

結局一緒に回んなのかよ。

まあ別にがつかりしてるわけじゃないけど…

…少し嫌がりすぎたかな?

試食ぐらじしてやればよかつたか…。

そのあとたっぷりアイスと服を買つて、くたぐたになりながらも俺たちは帰宅した。

「やべりがゼロになつたことせぬつまでもない。」

でもまあ、ミントが喜んでるからそれでよじとするか。

「パパ、プリントのこと、怒つてる?」

【話題でくつろいでいる時】ミントが恐る恐る尋ねてきた。

実はちょっと気にしてたのか…? ?

「こや。ママもな、昔、やんなやつて窓からプリントで作った紙飛行機飛ばしたことがあるんだ」「だ

「へー。ママが…」

「それからいく大事なプリントだつたんだナゾそんなの知らねー、て感じで…」

これをきっかけでのあともたくさん大河の事を話した。

俺たちがどんな風に出会い、どんな風に笑い、どんなふうに泣いたか。

たくさんの思い出を思い出すたび少し胸は痛むけど俺はもう大河から涙をそらしたりはしない。

俺の声はまだ震えていたが、もう涙はながれなかつた。

第3話「バースデープレゼント」やの紫（後編）

「Jリードで読んでくれてありがとうございます。」

次回はつじに運動会…つじに、でもなにけど

何が楽しみかとつじ竜児のお弁当が楽しみですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6350x/>

続とらドラ！

2011年10月23日03時08分発行